

春の便り

第 221 号

令和 2 年（2020）立教 182 年 7 月 23 日

発 行

〒 632-0071 天理市田井庄町 5 6 8 はるのひ詰所

芝 光男 TEL /Fax 0743-62-0429

五ッ いづれのかたもおなじこと

しあんさだめてついでこい

この道は、思案の道であるともいえます。原典には「思案」という言葉が、まことにたくさん出てまいります。おふでさきは、「これをはなれつ心しやんたのおで」というお歌で結ばれています。お道にとつて一番大切なのは、銘々がまず思案をして、心を定めるということです。（中略）

人は生きていくうえで選択を迫られます。人生の未来を左右するような重い選択の場を、時として迎えるものです。そのとき、思案の台となるのは何か。お道の信仰者ならば、それは親神様の思召に少しでも近づく方向への決断でなければならぬと思います。

また、それほど大層なものでもなくとも、私たちは日常の暮らしの中で、軽い選択を繰り返しているものです。（中略）しかし、それとても、おのずから信仰者としての選択、教えに基づいた思案と決断による行動が、自分の人生を形づくるのではないのでしょうか。

どちらのほうが親神様・教祖の思召に適うか思案をして、ついていく道、それが陽気ぐらしへ向かう道なのです。「みかぐらうたの心」永尾隆徳著より

詰所おちばがえりひのきしん

令和 2 年 7 月 12 日（日）

参加者（順不同、敬称略）

年春会長、菱屋正光、小島孝、

北田房充、嶋村欣也、

中川欣也、芝光男、万里子。

午前 9 時半詰所出発、ご本部
参拝。

おつとめよろづよく四下り
目。「だけど有難い」拝読。

厨房清掃・植木剪定・雑草
刈り。

今後の予定

8 月 9 日（日）

9 月 8 日（日）

10 月 13 日（日）



「父の言葉」

私たちが結婚して四十年近く経つが、新婚時代を過ごしたのは、前の詰所があった丹波市の旧家でした。結婚して、すぐに父が神実さんを持って神さんを祀りに来ました。終わって、ふたりに向かって言ったのは、「普通、神様は、その家の守り神としてお祀りする。講社祭という。しかし、今日お前のところにお祀りしたのは、お前の家族を守ってもらうための神様ではない。人さんにたすかってもらうため、人さんのことを願うための神さんや」と言われました。

今なら、そのことの意味がよくわかります。

お道を通ってきて、少なからずお道の勉強をしてきて、私は、この天理教の教えはなんと厳しいものかと思えます。おやさまが説かれた教えが多くの批判弾圧の中でも広がっていったのは、それまでの種々の教えとは全く違うからでした。

何が違うかといえ、それまでは念仏ひとつ唱えればたすかる、という「たすかりたい、たすけてほしい、という願うだけ」の信仰だったのに、おやさまは、「違う、ほんとにたすかりたいのなら、自分が人をたすけないと、ほんとにはたすからない」という教えだからです。

周囲からの非難弾圧にあったのは、「こんな教えが広まったら…」と危惧されたからではなかったかと思うのです。

私たちが日常歌う「みかぐらうた」も、よく読めば、「人助け」のためのお歌と思えます。

ふたりのところをおさめいよ
なにかのことをもあらわれる

(四下り目 二つ)

とあるのも、よく「夫婦ふたりの心をおさめよ」と解釈されていますが、私は「おたすける者の心とたすけられる者の心があつたら、不思議なことが表れてくる」という意味だと思ふのです。

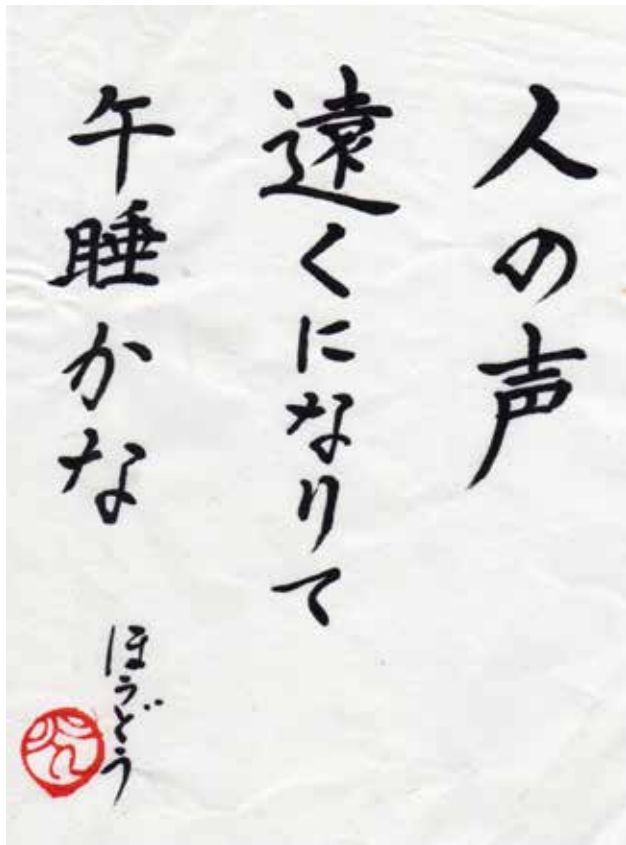
天理教を信仰するのは、「今までは、つい自分のことばかりを優先的に考えていました、これからは人のことを先に

思つていきます」と誓うことであり、人だすけを常に心に持つていくことだと思ふのです。

天理教には、難行苦行といわれる修行や荒行は全くありません。それだけに、なかなか、通るには覚悟のいる信仰だなどと思えます。「人をたすける心」を忘れてはならないのですから。

しかし、それが自分が真からたすかる道でもあると教えられているのです。





人の声遠くになりて午睡ごすい（ひる寝）かな

ほうどう

身上・事情のさととり方 I

貧乏や病氣など、陽気ぐらしの上にさまざまげになると見られるもの一切を、身上・事情という言葉で教えられるが、これらは影のようなものだと私は考えている。太陽のある限り、人間のいる所には必ず影がある。人間が歩けば必ず影もついてくる。影は邪魔だからあっちへ行けと言っても、そういう具合には参らぬ。そこで言う。心のほこりが実体であり、身上・事情は影である。ほこりのある限り、身上・事情は起こってくるし、ほこりという実体をそのまま放置しておいて、身上・事情という影だけをなくしようと、いくらもがいても、それはムダである。（中略）ほこりがどういう形で表に現れるか、その時期・形態・程度は一概には言えない。だが、遅かれ早かれ現れることだけは間違いない。（中略）

「善と悪とは皆現れる」のであり、親神は、善と悪を見定め、見分け、善悪共に皆それぞれの人間に返される。善にはよき運命、悪には悪い運命として返されるのである。だから、よい運命だけ返してもらいたい、悪い運命は何とか返さないでほしいと願っても、そうか問屋が下ろさない。

善悪共に身に返ってくる。―これを心通りの守護と言うのである。

親神が人間の実の親であり、万能の神なら、何も人間が怖れ嫌っている身上や事情を表に現さなくてもいいではないか、その方がむしろ人間は親神をたたえ慕うのではないか、という意見もあるだろう。だがそれでは人間は救われないのである。己れより発したものは己れに戻る。己れが蒔いた種は己れが刈り取る。ここに人間の成人と向上があるのだ。

「肉眼・心眼・天眼」藤田雄十著より

